

弁論文を書くころ 「メモ欄なし」

身のまわりの生活をよく見つめ、そこから問題を見つけて文章に書き表してみよう。

1 弁論文を書く手順を覚えよう

- ① 身近な生活の中から題材を見つめる。
見つけた題材から、自分なりの題材を選ぶ。
- ② 言いたいこと（意見や主張）の中心（論旨）をはっきりさせる。
- ③ 弁論文に必要な材料を集め、効果的な文章構成を考える。
聴衆を納得させ、同意を得られるように表現を工夫する。
- ④

2 弁論文の構想を練ってみよう

- 構想メモ用紙を活用して書いてみよう。

(1) 身近な生活の中から題材を見つめよう

《参考文》では、新しいことに挑戦する大切さを、部活動を通して実感していく過程が述べられている。中学生に身近な「部活動」を題材に取り上げることにより、体験に裏付けされた説得力が感じられる。

次の題材を参考に自分なりの題材をいくつかあげてみよう。

社会生活	家庭生活	学校生活
<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢化社会を考える ○ 生きるということ ○ 視野を広げて ○ 清掃体験から 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家族の一員として ○ 命の尊さ ○ 祖母に学ぶ ○ わが家のペット 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 部活動から得たもの ○ 本当の友達とは ○ 協力、団結すること ○ 責任感とは
<ul style="list-style-type: none"> ○ 障害者を支えて ○ 社会のルールの上で ○ 国際社会の一員として ○ 誰かのために 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 母の教え ○ ものの心 ○ 私の宝 ○ 会話の大切さ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先輩後輩について ○ あいさつのひとこと ○ 真の勇氣 ○ いじめに思う

(2) 自分が取り上げた題材から、一つ選んでみよう

(3) 言いたいこと(意見や主張)の中心(論旨)をはっきりさせよう

《参考文》で述べたいことの論旨は次のようになる。

自分が不得意だと思っていることや、自分の力ではどうしようもないことに基づくと、「あきらめる」という結果になりがちである。しかし、自分を変えようと運動部に入り努力を重ねてみると、そこには精神的に強くなった自分がいた。このように挑戦することはすばらしい。

《参考文》を例に、自分の経験をもと(根拠)にして、自分はこう考える(主張)という論旨を書いてみよう。

(4) 弁論文に必要な材料を集め、効果的な文章構成を考えよう

《参考文》の文章構成は次のようになっている。

序論①

書き出しを工夫しながら、これからどんな問題について述べようとしているかをはっきりさせる。

- 運動部に入る。これはぼくにとって「挑戦」に値すること。
- 小学校の時から運動することが苦手だった。できないことは、いつもあきらめる自分が嫌だった。

本論②③④

問題を提示し、次の体験へとつないでいる。

- 挑戦しなければ何も変わらないのではないか。

述べたいことの論旨につながる、筆者の具体的事実(体験)や気持ちを書く。

- そこで運動部のバドミントン部に入部する。
- 他に劣っている自分だが、毎日続けた腕立て伏せで自信もてるようになった。

他の理解を得るためには建設的なものの見方、考え方が必要である。

- 練習が辛い日も、これは自分への挑戦と言い聞かせ走り続けた。

体験やきっかけで自分考え方や行動が変わったという部分があると効果的である。

- 中総体区大会で、努力の結果が出た。挑戦は自分を強くするためのチャンスなのだと思うようになった。

結論⑩⑪

全体を要約し、自分の意見・主張をはっきりさせる。

- 部活動引退後、駅伝や合唱にも挑戦したが、今後もあきらめずに挑戦する強い人間になっていきたい。

現在や未来につながる内容にする。

- 明日もまたぼくは新しいことに挑戦し続ける。

(5) 聴衆を納得させ、同意を得られるように表現を工夫しよう

- ・ 書き出しと結びの文章を実際に書いてみよう。
- ・ 一文の長さを短くし、主語と述語をできるだけ近づける。
- ・ 言葉を繰り返して強調したり、同じことを違った言葉で言い換えたりしてみる。
- ・ 演題を考えよう。(題名と内容が一致するか、考える。)

3 全文を書いたら、次の点に注意して推敲し清書しよう

- ・ 論理の流れに矛盾はないか。
- ・ 中学生らしい言葉づかいをしているか。
- ・ 自分の主張が明確で、ひとりよがりな点はないか。
- ・ 自分の主張を支える体験や根拠があげられているか。
- ・ 聴衆をひきつける書き出し・結びになっているか。

- ・ 文体が、敬体(「です」「ます」調)に統一されているか。
- ・ 四百字詰原稿用紙三枚半ぐらいの長さ(発表時間五分)で書くことができたか。

(初めは長く書いてみて、最後には三枚半ぐらいにまとめてみる。)

発表するときは、次の点に注意しよう

- ・ 発声の仕方、声の抑揚、間の取り方などを工夫する。
- ・ 話す速度は、一分間に三百字程度を目安にするとよい。
- ・ 難しい言葉や同音異義語は、できるだけ使わないで、耳で聞いてわかる言葉で話す。
- ・ 話す姿勢や顔の表情などにも注意する。

※ 文集「こだま」の弁論文を読んで参考にしよう。